

70
70th Anniversary
1953-2023

70
70th Anniversary
1953-2023
行田協立診療所
70周年記念誌



 医療生協さいたま

発行元：行田協立診療所（2023年10月発行）
〒361-0052 埼玉県行田市本丸18-3
Tel. 048-556-4581（代）

<https://gyouda-clinic.coop/>

地域とともに歩んで70年
未来につなごう これからも

 医療生協さいたま

医療生協さいたま 私たちのこころ

人が人として大切にされる 社会をめざし
 保健・医療・介護の 事業と運動をとおして
 様々な人たちと 手をつなぎあい
 平和とくらしを守り 健康で笑顔あるまちを つくりまします。



医療生協さいたま生活協同組合 理事長
雪田 慎二

ご挨拶

行田協立診療所が開設70周年を迎えました。地域の皆様方から長きにわたってご支援いただき、地域から愛される診療所に育てていただいたことに深く感謝を申し上げます。医療生協の診療所の役割は、日々の診療や日常の困りごと相談だけではありません。困ったことは特にないけど生き生きと暮らしたい、いろいろな人と交流したい、誰かのお役にたたい、様々な願いと思いを表現できる場だと思います。そういった場では、年齢、性別、病気や障害のあるなしなどは関係ありません。必要なのは、地域に対する暖かいまなざしだと思います。いのちや健康、安心、平和など、皆さんがごく普通に必要としていることを一緒に作り上げることが大切です。行田協立診療所は、移転新築工事により、医科・歯科の診療、ケアセンターを充実させることに加えて、地域交流スペース・オシノテラスを併設することになりました。皆様の願いや思いをぜひ持ち寄っていただき、地域の中で一緒に実現させていきましょう。今後とも末永いお付き合いをお願い申し上げます。



行田協立診療所 所長
井上 豪

ご挨拶

2019年に開始した行田協立診療所の移転新築工事は新型コロナで依然委縮ムードの漂う2021年4月に竣工を迎えました。敷地内には地域交流スペースを擁し、駐車場脇には小さな畑を設けるなど、地域の方が受診でなくても立ち寄りたくなる診療所を目指しました。その甲斐あってか、新しくなった建物に隣接する小学校・中学校の生徒が見学や利用に来るなど、地域密着型診療所としての機能が果たされています。前身の行田診療所が誕生してから70年、これまで地元住民、組合員の皆さまに診療所を支えてもらったことを感謝すると共に、これからも地域の健康づくりに寄与して参る所存です。ケアセンターさきたま共々、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



行田市長
行田 邦子

祝辞

行田協立診療所が開立70周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。貴診療所におかれましては、昭和28年に開設以来、今日に至るまで70年の長きにわたり、地域のニーズに対応した医療・福祉の提供に務められ、今日まで大きな発展を遂げられてまいりました。特に、近年の高齢化が進展する中、医療、歯科、介護の連携により、その方が住み慣れた場所で暮らし続けることを支えていただくなど、これまでの皆様の弛まぬ御努力と御労苦に対しまして、深甚なる敬意を表する次第であります。市としても、すべての市民が、いきいき暮らし、共に支え合うまちをつくるため、保健・医療・福祉対策の推進に努めてまいりますので、今後とも、皆様の変わらぬ御支援、御協力をよろしくお願いいたします。結びに、行田協立診療所の今後、ますますの御発展と、皆様の御健勝と御活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



全日本民医連 会長
増田 剛

祝辞

70周年おめでとうございます。故肥田舜太郎先生をはじめ、多くの民医連職員と医療生協組合員の協同した力で、70年の歩みを刻み、地域に民医連・医療生協運動の確固たる地歩を築いて来られたことに、心からの敬意を表したいと思えます。私自身、行田協立病院時代から一定の関わりを持たせて頂きました。病床を閉じ診療所化する際の最後の当直医が実は私で、その日の検食簿に思いを書き込んだことを感慨深く覚えています。そして2002年から約3年弱、所長として勤務し、事業所管理医師としてのキャリアをこの地でスタートさせて頂きました。お隣の実に風情ある魅力的な診療所は、2021年のリニューアルで最新鋭のモダンな建物に変身し、一味違う、新たな進化を感じさせる、地域でも評判のスポットになっています。コロナ禍で傷んだ地域における人権の砦として、益々ご活躍されることを祈念し、メッセージと致します。

目次

P01-02	医療生協さいたま 私たちのこころ・挨拶	P11-12	行田協立診療所の変遷
P03-04	合併前40年の歴史	P13-14	部門紹介
P05-06	合併後30年の歴史	P15-17	利根北地区 支部紹介
P07-10	70年の軌跡を当事者たちとともに	P18	編集後記

1953

医療生協さいたま 合併前40年の歴史

- 1953年 行田診療所開設
初代所長に肥田舜太郎医師就任
- 1956年 患者会「行田ながいき会」発足
- 1964年 行田協立病院開院（30床）
初代院長に小林盈蔵医師就任
- 1965年 行田医療生活協同組合設立
- 1973年 肥田舜太郎医師が埼玉被団協しらさぎ会
事務局長就任
老人医療費支給制度発足（70歳以上の老人医療費が無料化）
- 1978年 行田協立病院移転新築（45床）
- 1979年 第一期保健大学開校 37名の保健委員が誕生
- 1981年 院内保育所開設（5年後に廃止）
- 1983年 老人医療費支給制度廃止（老人医療費の有料化）
- 1988年 生協会館完成
- 1989年 第25回総代会で県内医療生協合併協議
- 1992年 行田協立診療所開設 12月に病床閉鎖
医療生協さいたま生活協同組合誕生（6医療生協が合併）



1953年は埼玉県全域に診療所が開設されました（熊谷、行田、川口、さいわい、所沢）



1957年
(昭和32年)

肥田所長 市議員選挙に立候補し、 3位で当選をはたす

このころ肥田医師は行田市議会議員選挙に立候補、日々の暮らしを取り上げた辻説法は市民の心をとらえ、3位という高位当選をはたしています。



1965年
(昭和40年)

県下初の医療生活協同組合が誕生

患者さんや市民が出資をすることで、病院の運営に参加したり、健康づくりに主体的に取り組めるようになりました。患者さんが医療活動に参加したり、組合員さんが保健予防活動の中心になるのは、当時としては画期的なことでした。



1978年
(昭和53年)

人口比1割を超える組合員数に

新病院建設当時、人口4万人程の行田市で5000人も組合員を有していました。班は160班を数え、班健診（出張健診）を55カ所まで実施、翌年には健康づくりの担い手を養成する保健大学を開校しました。



1992年
(平成4年)

医療生協の保健大学

写真は第7期の保健大学終了式の様子ですが、この時期になると、男性の受講者も多くなり、多くの卒業生（保健委員）が支部の活動を支援しました。



1993

医療生協さいたま 合併後30年の歴史



事業所数: 12 組合員数: 12万人 出資金総額: 25億円 支部数: 111カ所

きょうりつ訪問看護ステーション開設

ケアセンターさきたま市役所前に開設
デイケア・居宅介護支援事業所開設

歯科開設 副所長に早田繁医師就任

デイケアからデイサービスへ事業変更

ケアセンターさきたま診療所1階へ移転

歯科リニューアル ユニットが4台から5台へ

無料低額診療事業開始

デイサービスを地域密着型へ変更

行田協立診療所敷地内移転新築
デイケア・小規模多機能ホーム開設
10月地域包括支援センター認可

地域交流棟オシノテラス完成

グッドデザイン賞受賞

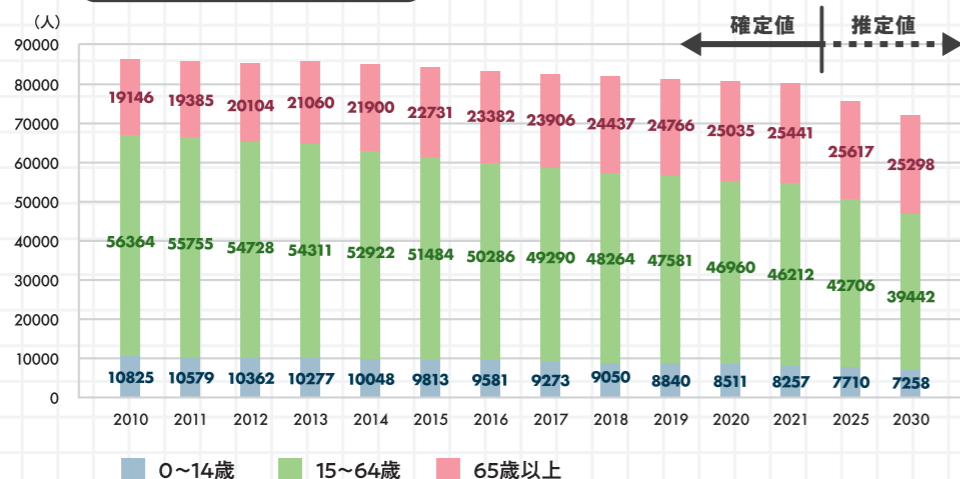
事業所数: 35 組合員数: 24万人 出資金総額: 65億円 支部数: 156カ所



1992年県内6つの医療生協が合併し、医療生協さいたま生活協同組合が誕生しました。

- 1993年
- 1998年
- 2000年
- 2001年
- 2006年
- 2009年
- 2013年
- 2015年
- 2016年
- 2020年
- 2021年
- 2022年
- 2023年

行田市 年齢3区分別人口の推移



2023

2004年
(平成16年)

健康まつり

現全日本民医連増田剛会長(写真中央)は2004年当時は行田協立診療所所長でした。健康まつりでは準備から片付けまで大活躍でした。



2013年
(平成25年)

Pチャリ

医療生協さいたま内の反核・平和を願う若手職員が集まり、秩父から川口までを自転車で縦走しました。写真は行田協立診療所に立ち寄った際のものです。



2021年
(令和3年)

竣工式

2021年4月24日(土)診療所駐車場を会場に31名の来賓を迎え竣工式を執り行いました。雪田理事長による施主挨拶、石井直彦元行田市長挨拶、大野元裕埼玉県知事のお祝いメッセージ披露、井上所長による感謝状贈呈などが行われ、式後の完成見学会では新診療所のお披露目もしました。



フードパントリー・オシノ食堂

コロナ禍で生活に困っている方が増えてきた2020年11月、自宅で余っている食材などを集めて無償でお渡しするフードパントリーを開始しました。その後、多世代食堂(オシノ食堂)を開始。毎回、120人分以上のお弁当を配布しています。地元のボランティアさんにも協力して頂きながら継続することができています。



医療生協合併30周年健康まつり

2022年10月23日(日)晴天の元、忍小学校吹奏楽部の演奏、エレキギター弾き語り、オカリナ&バイオリンセッション、フォークダンスさくらなどのステージ企画や、支部バザー、健康チェック、こどもコーナーなどに400名以上が来場しました。



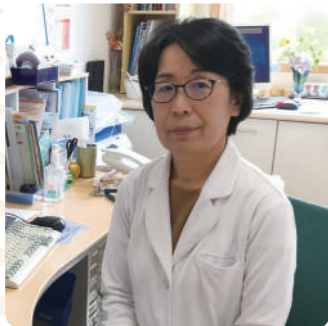
70年の軌跡を当事者たちとともに



浦和民主診療所 医師
肥田 泰



故肥田舜太郎医師



かくたクリニック 所長
角田 令子



健康まつりで挨拶する
角田所長(当時)

父 肥田舜太郎医師の記憶

Q 行田に住んでいた当時の記憶は残っていますか？

A 開設当時の行田は貧しい街で、ほとんどの家でお母さんたちが、ミシンをふんで足袋の内職をしていました。小学校3年の夏休みに東京から転校しましたが、あーだんべ、そーだんべの言葉づかいにまるで外国に来たように感じ、慣れるのに3ヶ月くらいかかりました。

Q 肥田舜太郎先生はどんな方でしたか？

A 父親としての姿は、夕食を一緒に食べた記憶はなく、どこかへ連れて行ってもらった記憶もありません。民医連の会議で夜中の2時、3時に帰ることが多く、よく体がつづくと感心していました。依頼されれば、いつでも往診に最初のころは自転車、ついでスクーター、最後は自動車で町中を駆けまわっていました。そんな父親の後ろ姿をみて育ちました

Q これからの行田に期待することは？

A 1.なんでも気軽に相談できる診療所になること 2.ケアセンター、地域の医療生協の支部と協力して安心して住み続けられる街づくりに取り組むこと 3.周囲の医療機関、施設と連携を深めること 4.熊谷生協病院との連携をすること、です。地域になくてはならない診療所として存在感を示し続けてください。

行田協立診療所の思いで

Q 働いていた当時のことを教えてください

A 私は協立病院の院長だった梅津先生の後を継いで1998年から2002年まで行田協立診療所で勤務しました。着任前は現在の場所(熊谷市上之)に移転してくる前の熊谷生協病院で夫婦で勤務していました。当時の行田協立診療所は病棟を閉鎖したばかりで、それまで病室だった部屋には何もなく、ガランとしていたことを覚えています。また、2000年の介護保険が開始した頃には、介護保険の手続きに必要な主治医意見書をたくさん記載した記憶があります。

Q 現在勤務されているかくたクリニックについて教えてください

A かくたクリニックは熊谷市佐谷田に位置し、内科と小児科を併設しています。1日に120~150名の患者さんが来所されますが、行田市と熊谷市の堺にクリニックがあるので、行田市在住の方も多く来所されます。具合の悪い方や精査が必要な方を近くの熊谷生協病院に紹介することもあります。また、ケアセンターさきたまには訪問看護の依頼をするなど、医療生協の介護事業所とも連携をとっています。

ケアセンターさきたま開設



ケアセンター開設時所長
金子 良子



現ケアセンター所長
藤川 明美

Q ケアセンター開設の経緯を教えてください。

A 「地域に出るように」との本部からの指示の元、市役所前の患者さん宅を借りて居宅・訪問介護・訪問看護の体制でスタートしました。

Q 苦勞した事はどんな事ですか？
また、開設して良かった事は？

A 病院・診療所勤務の経験はあったが在宅は未経験だったので勉強に励みました。外来では決して見ることのない患者の抱える生活の困りごとを知ることができ、診療所と連携して解決したり、時には議員さんの協力の元行政にも訴えに行きました。「在宅を支えることが社会保障に繋がる」と確信し、仕事にやりがいを感じていました。

理事として、事業所利用委員長として

Q 理事になった当時苦勞したことは？

A もともと転勤族でしたが、住まいに近い行田協立診療所にかかるようになり、その後理事に選出されました。30年前の医療生協合併当時は、それまで2地区に分かれていた活動拠点を行田・羽生・加須で統一化したばかりで、理事一人で土地勘もなく日々迷いながら活動していました。

Q 印象に残っている出来事はありますか？

A 当時は地元にも支部もなく、支部長さんや中心になる担い手さんを探しながら医療生協を広げようという時期でした。地元をよく知る診療所の事務や看護職員と一緒に「保健大学」「社保学校」を立ち上げていったことが、現在も続く保健教室・くらしの学校などの活動につながったと思います。

患者との距離が近かった当時

Q 30年以上前はどんな仕事をされていたか？

A 昔はピペット(長いストロー状のパイプ)で採血した血を自分の口で吸って、それを試薬につけて検査していました。ひとりで往診先に心電図を持って行って検査することもあって「あなた誰ですか？」と患者さんに言われた事も(笑)。健康診断が今のように主流でなかったから、組合員の集まる班会によく行って、ウロペーパーで尿塩分チェックなどをしていました。人と人が今以上に深くつながっていたように思います。



元臨床検査技師 馬場 久美子 / 臨床検査技師 栗原 富子

70年の軌跡を当事者たちとともに

2023年6月9日にオシノテラスでインタビューを行いました



南河原支部長
工藤 みどり



元理事組合員
鈴木 みち



利根北地区理事
池田 真理子



元看護師長
栗原 和子



まちづくりコーディネーター (MC)
菊池 明

池田理事 70年間、地域で頑張ってきた方々のお話をお伺いできたらと思います。

栗原和子さん 『ヒロシマを生きのびて』(あけび書房)にもあるように、診療所は行田になくはない存在でした。建物は近くにあったNHKを解体した後の古材や廃材を持ってきて大工さんたちがつくってくれた。往診は大変な家ばかりで、斉条、埼玉、利根川沿いにも自転車で行きました。入院施設の無い時代、輸血、点滴、酸素、検査など病棟並みのことを時間がかかっても家の中でやったんです。ずっと寄り添うわけだから家族とも仲良くなった。今なら、訪問看護が患者さんと一語話ができると思うわ。予防・早期発見・元気で過ごせる秘訣・生活の工夫を患者さんやご家族の方々から学びました。一緒につくり上げていくことが健康づくりだとあらためて感じます。

鈴木みちさん 当時は、病人の隣でも、死んでいる家族がいても、赤ん坊が泣いていてもミシンを踏んでいました。肥田舜太郎先生は、どこの講演でもこのエピソードを話されていた。我が家も熱を出した子の横で夜遅く足袋を縫っていました。当時一般の職工さんの日給は350円。300足で300円の稼ぎ。そんな時代を経て86歳になった(笑)。

栗原和子さん 貧困家庭だけでなく、お大尽(お金持ち)の家も往診していました。夜中医者に電話したら「いないと言え」と後ろで聞こえ、しょうがなく協立に電話したらすぐ来てくれたと。悲惨な家は行くとすぐにわかります。昭和40年過ぎでも、生活が苦しい家はノミ・シラミが飛んでいた。父娘2人暮らしの家に掃除に入ったこともある。往診から戻ると「死んじゃったよー」と連絡が来て隣に水を貰いに行く…それが珍しくなく何件もありました。

鈴木みちさん 生活の格差は本当にあった。当時は大変でした。

池田理事 30年前の医療生協さいたま合併当時の様子も知りたいです。

栗原和子さん 行田が一番財産がなくてね。合併時に当時あった院内保育所も売るほどだった。鈴木みちさんに食事作りに来てもらったり、職員の子がたくさんいて皆共稼ぎ。夜勤明けに家に送るなど皆お互い様だったのよ。だからこの世代は人間関係が濃いわね!(笑)。

栗原和子さん 合併は両論あった。泣きの涙です。ボーナスは冬に1万円。「看護長、今晚ごちそう食べたら終わりですわ…」と言われ申し訳なかった、大変な思いをしたと思う。合併に飛び込んだ大井と行田が同じ思いをしたはず。辞めて行く職員もいたし、残った方はがんばってくれた。協立病院からベッドのなくなる最後の夜は子どもと一緒に泊めたのよ。あの増田先生(現全日本民医連会長)が当直で(笑)。

工藤みどりさん 亡き母の生協の証券が金庫から出てきたわ。合併当時の役員の名前が載っているわね。

鈴木みちさん 60年ほど前は1口1,000円の出資を100円ずつ積み立てていたのよね。

池田理事 合併前はどんな活動をなさっていましたか?

鈴木みちさん 全国の医療生協に学ぶため、秩父や川口、福島にも行きました。お茶のみ班会に職員が来たり。当時の組織担当に「塩分計ろう!」と言われたり(笑)。

栗原和子さん 患者会も盛んで、糖尿病・高血圧・腎臓友の会など、30人程で楽しく療養していた。生活背景をつかむ、データを追いかける、気になる患者宅に出かける、それを大事にした。

菊池MC 地域に出るのが普通だったんですね。

工藤みどりさん 保健大学の総会でバス旅行もしたね。知識ももらって、その後も色々つながって。

鈴木みちさん 職員と旅行にも行ったね。小林盈蔵先生は水戸黄門、肥田舜太郎先生はバナナのたたき売りが得意芸で(笑)。

池田理事 未来に向け、これからの職員や組合員さんに大事にしてほしいことはどんなことでしょうか。

栗原和子さん 医療を受けて返すだけでなく生活背景、社会背景と合わせて診て、病気を治していく。貧困でも今と昔とでは事情が違って来るでしょう。

鈴木みちさん 今の若い人は「老人医療費が無料」「800円だった」ことを知らない。革新都政の頃ね。

栗原和子さん 職員は今の状態を把握して自分はどう生きて行くか、どう立ち向かって行くかを考えて欲しい。社会に目を向けること。前は先生も白衣でメーデーに参加していたわ。ウクライナのダム破壊で「これは戦争犯罪だ!」というも、年寄りから医療費を巻き上げて防衛費にするのも、医療に関係ないことではないでしょうか?医療生協で看護の本『続-地域とともに産み・育み・看とる』を、たくさんの人に読んでほしいです。最後に。オシノテラスで高校生3人が勉強していて、目標は?と聞くと「医療に進みたい」と返事があった。そういう子らが入りできる所はとても良い構想だなと。事業を広げ、地域に入って行く時、根っこに想いを入れていくこと。一所懸命にもう一つプラスするとイイナと思う。

菊池MC 新しい職員にもこういう話を聴く機会を設けたいと思いました!

池田理事 皆さんありがとうございました!



行田協立診療所の変遷

行田協立診療所は1953年の開設以降、3回の移転(または敷地内移転)をしています。行田市市内初の病院となったり、介護保険制度開始年にはケアセンターを開設するなど、地域住民・組合員の要望に沿うような形で建物の姿を変えてきました。



1953年 行田協立診療所開設

1953年(昭和28年)行田診療所開設。
初代所長は肥田舜太郎医師でした。



1964年 行田市市内の初の病院として移転

1964年(昭和39年)行田協立病院開設。
行田市内ではじめて病院が開院しました。

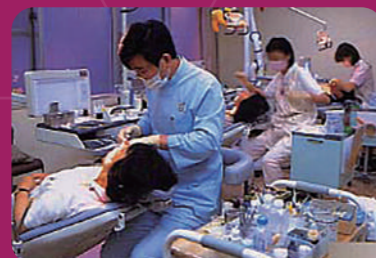


1978年 現在の地へ移転

行田協立病院は1978年(昭和53年)に現在の地へ
引っ越し、1992年(平成4年)診療所となりました。



2000年市役所前にケアセンターさきたま開設



2001年診療所内に歯科開設



2006年デイサービスうさきろ開設

2020年 同一敷地内で新築移転

医科・歯科・介護が一体的に提供できるよう、また、誰もが気軽に立ち寄れるような地域密着型診療所に生まれ変わりました。1階はコンクリート造り、2階は木造で、隣接する忍城の景観にマッチする外観です。



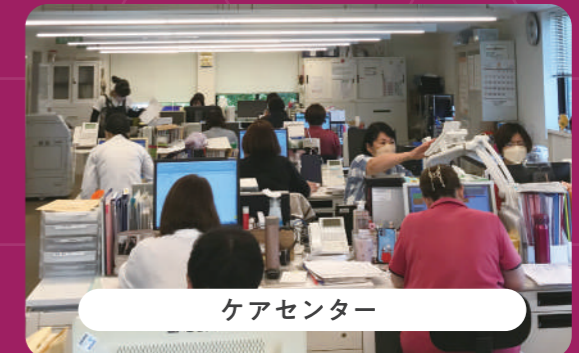
小規模多機能ホーム



通所リハビリ



診療所待合



ケアセンター

2022年 グッドデザイン賞受賞



評価コメント(抜粋)

地域交流棟のオシノテラスを別棟で併設し、誰もが気軽にアクセスできる空間は、大変魅力的である。道の駅のような立ち寄りやすさを兼ね備えた建築は、このまちの医療拠点となり、さらに中学校が隣接していることから、生きた教育体験の場としても地域への好展開が期待される。

行田協立診療所・ケアセンターさきたま 部門紹介



外来部門

外来部門は、看護師7名、保健師1名、薬剤師1名、臨床検査技師3名、放射線技師2名、医療事務7名です。高血圧、糖尿病、脂質異常症など慢性疾患の療養援助・患者指導、胃内視鏡検査の介助、健康診断などを行っています。訪問診療は医師と共に患者様のお宅に伺い、最期まで住み慣れた自宅で過ごしたいというお気持ちに寄り添う医療を提供しております。



歯科部門

歯科医師3名、歯科衛生士7名、歯科助手1名の11名の部署です。一般歯科の他に、訪問診療にも力を入れています。当院内科からの紹介や、外来通院が難しくなった方をはじめ、行田市内の施設や病院からも多くの依頼をいただいております。摂食嚥下分野にも力を入れており、リハビリスタッフとも連携して「最後まで口から食べる」を支援しています。



通所リハビリ

短時間通所リハビリたびくらは、リハビリ職員、介護職員、送迎ドライバーの10名の部署です。ご利用者様には、温かみがありかつ効果的なサービス提供しています。リハビリ職員は生活期リハビリの経験豊富な職員が揃い、100歳体操や地域ケア会議、通所Cなどのまちづくりにも積極的に参加しています。



訪問看護

看護師11名(保健師2名、緩和ケア認定看護師1名)、セラピスト6名(理学、作業、言語)看護補助1名が皆さまのご自宅を訪問させていただきます。乳幼児から高齢者、障害をもつ方の医療、日常生活ケア、在宅取りまで、優しい看護師11名がご本人ご家族の想いに沿ったケアを提供しています。また3種セラピストによる専門的な支援は皆さまが自宅で自分らしく過ごしたい気持ちに寄り添ったプログラムとなっています。



訪問介護・定期巡回

介護職員23名、事務1名の総勢24名で稼働しています。利用者様の状況に合わせてヘルパーがご自宅に伺う訪問介護、または、24時間定期巡回介護・看護サービスを提供しています。いつまでも住み慣れた我が家で暮らしていけるよう、その方の要望になるべく沿った形で支援を行なっています。



居宅支援

介護支援専門員6名、事務1名の部署です。介護保険の窓口として相談、申請、ケアプラン作成・利用状況確認、事業所との連絡調整、状況に応じたプランの修正・変更、請求業務などを行っています。介護を必要とする人ができる限り自分の意志や力で生活ができるようにサポートしていきます。



小規模多機能ホーム

小規模多機能ホームうきしろは、介護職、看護師、ドライバー、事務の23名の部署です。地域密着型のサービスとして、その人らしい「生き方」「暮らし方」の実現に向けて家庭的な雰囲気の中で心に寄り添った介護『うきしろのある生活』の提供に努めて参ります。

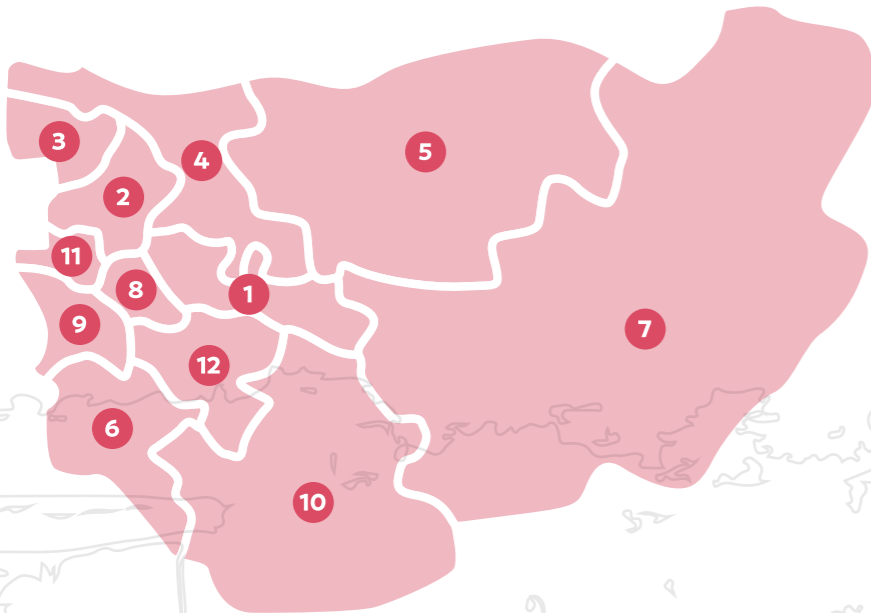


地域包括支援センター

地域包括支援センターは介護保険法に基づく行田市の委託事業です。主に高齢者の様々な生活問題や困りごとの相談にのり、その解決を目指す総合相談、及び、要支援者の介護サービス利用支援などを担います。職員は、管理者兼主任介護支援専門員、社会福祉士、2名の看護師に介護支援専門員1名、事務員1名を加え、計6名で業務を行っています。

利根北地区 支部紹介

2013年のネットワーク地区制を導入後、県北地域の利根北地区は行田市、羽生市、加須市となり、支部は10支部あります。以前の事業所地区制の圏域である鴻巣市、旧吹上町、旧川里町にも2支部があり、これらの地域の組合員が生活協同組合の「出資・利用・運営」を支部活動や健康まつり、さまざまなイベントを通して盛り上げています。



利根北地区ウォーキング(さきたま古墳公園)



組合員と職員で浮き城まつりに参加

1 行田東支部

組合員数:1,367人 座間文子 支部長

行田東支部は現在5名の運営委員で皆働きながらの活動です。土日の活動が多く拠点事務所を中心に「桜カフェ」「子どもの見守り」を主に地域の多世代を巻き込んだ「地域まるごと明るいまちづくり」を活動のテーマにしています。他団体からの協力も得ながら地域に根ざした、後につながる支部活動を進めています。



2 星河支部

組合員数:1,292人 太田セ津子 支部長

支部の取り組みは、地域や他団体、公民館文化祭での健康チェックや組合員訪問など。バスハイクも今年度再開の予定です。また、配布者さんの集いも行い交流しています。組合員訪問は意見や要望が聞ける貴重な時間です。地域に根づいた活動で楽しい企画を計画して、一人でも多くの組合員さんと顔を合わせたいと思います。



3

南河原支部

組合員数:521人 工藤みどり 支部長

支部活動地域が利根北地区になり、3年目に入りました。旧南河原村内全域が対象地域。組合員の顔が見える事から地域に医療生協が見える活動を大切と思っています。地域住民の健康づくりに役立つ支部活動や企画を旨とし、楽しみながら継続中!



4

見沼支部

組合員数:1,292人 伊藤直美 支部長

私たちは、好きな事・やってみたい事を活動の中心にしてきました。岩見支部長の「畑会」が『うどん会・小さな旅・ベジータ班』に発展しました。バザーは東日本大震災・コロナ禍で中断。生協の出前講座『介護保険のいろは』を昨年からは開始。これからも健康で笑いの絶えない支部活動をめざします。



5

利根支部

組合員数:1,024人 大戸ひろ子 支部長

支部は1,000人程で、羽生市全域が、利根支部です。診療所迄は30分という位置です。6人の運営委員が、健康チェックを中心にウォーキング、バスハイクで組合員さんと親睦を計り健康第一に活動を広げて行き、放射線量測定(年3回)も続けていきます。本年度からはくらしサポーター制度の利用で、高齢者の一人暮らしの支援をしていこうと思います。



6

吹上支部

組合員数:1,365人 中島光知子 支部長

吹上支部は旧吹上町が活動エリアです。運営委員は6人と少ないですが、にぎやかに活動しています。安心ルームを吹上団地集会場で開催しています。第一水曜日「ココロンサロン」、第三水曜日「手作りサロン」どちらも午後1時半からです。その他学習会・バスハイク・ウォーキングなど計画しています。皆さんの参加お待ちしております。



7

加須支部

組合員数：801人 松本幸子 支部長

加須市内が担当の支部です。健康まつりでの「おはぎ」や手作り食材は、すぐに完売するほど大変な人気です。事業所から一番遠い支部ですが、配布者さんやみんなのつながり、組合員同士の見守りで、これからもフレイル予防の学習や楽しい集い、地域訪問で事業を支える活動をしていきます。



8

行田中央支部

組合員数：1,927人 堀口充子 支部長

『けんこうと平和』は地元で840部を配っています。組合員になり、地域の中で仲間と出会い集うことの大切さ、人と人とのつながりの大切さを強く実感することができました。各名所でのウォーキングで健康づくり、恒例となった総会をかねた那須の芦野温泉は四時間の滞在で、相互の交流と心身のリフレッシュで有意義な一日を過ごすことができた支部活動でした。



9

行田西支部

組合員数：2,089人 高橋妙子 支部長

地区の中で、一番多い組合員数で構成されている支部ながら運営委員2名という支部です。運営委員確保の為、いろいろな講座を企画して奮闘中です。2020年からスタートした「手作りサロン・コア」はオンラインで開催する事により、他支部の組合員も気軽に立ち寄り参加できるサロンになって、月2回クラフトテープを使ってのカゴや、小物作りを楽しんでいます。



10

鴻巣・川里支部

組合員数：1,656人 高久剛吉 支部長

旧鴻巣と旧川里が私たちの支部です。大事にしてきた組合員参加、地域とつながる活動がコロナ禍で制限される中、数日の仕込みでできる「みそ作り」が始まりました。3日かけ100キロを仕込み、健康まつりで販売。3ヶ月で完売と喜ばれました。困難を逆手に、食の健康を意識し、材料を吟味した「手作り味噌」を、今後も支部活動の1つに位置づけていきます。



11

西北支部

組合員数：869人(休止中)

12

行田南支部

組合員数：797人(休止中)

行田・忍地区の紹介

忍城



古代蓮



さきたま古墳群



水城公園



行田市は埼玉県名発祥の地ともいわれ、至るところに名所があります。江戸時代の城郭を復元した忍城は行田協立診療所のまさに隣、忍地区のシンボルとも言える建造物です。さきたま古墳群(写真は丸墓古墳)は9基もの大型古墳が一カ所に集中しています。稲荷山古墳から出土した「金錯銘鉄剣」は小学校の社会科で学んで知っているという方もいらっしゃるのではないのでしょうか。古代蓮は1400~3000年前の行田蓮が12万株も植えられていて、早朝に訪れると開花している蓮の花を楽しむことができます。診療所から徒歩5分の水城公園は、地域住民の憩いの場として、また、桜の名所としても知られています。百聞は一見に如かず。ぜひ一度訪れてみてください。

編集後記

当プロジェクトの委員長を務めさせて頂くにあたり、70年間の歴史を築き上げてこられた方々の功績を目のあたりにしました。診療所とケアセンターがいかに関わり、地域住民と一体となって歩んできたか、そこにあってこられた諸先輩の熱い想いを、現在働いている職員と組合員にも受け継いでいきたいと強く感じました。次の80周年、90周年、100周年と、変わらずに地域で愛される診療所であり続けられるよう、また、この記念誌が当時を振り返る資料として少しでも役に立っていれば幸いです。

70周年記念誌プロジェクト委員長 池田真理子

